

牛群検定通信 No.186

～検定データの季節変化～

新年明けましておめでとうございます。本年も、牛群検定の活用情報をドンドンお知らせしますので、どうぞよろしくお願いします。

今回は年も改まりましたので、検定データの季節変化について考えてみたいと思います。特にこの1月から6月頃までどういった変化があり、どういったことに気をつけて牛群管理すれば良いか季節変化から解説します。

1 乳量の季節変化

都府県における毎月の日乳量は、この1月ごろから乳量は増えていき4～6月ごろがピークになるのが一般的な季節変化です。よって、1月からは乳量が増えることを前提に飼養管理を見直されると良いでしょう。そのあと、7～9月は暑熱により乳量は急降下し、最も搾れない時期となり、その後10～12月ごろまでが回復期となります。

参考までに、北海道では6月ごろに日乳量のピークになるというのは変わりませんが7～9月の暑熱の影響が小さいので都府県ほどに乳量を下げません。

2 乳成分の季節変化

毎月の乳脂率、蛋白質率、無脂固形分率の季節変化は、どれも大きな違いはありません。一般に、これら各乳成分は12～1月をピークに、その後は下がりはじめ、7～9月ごろに最も低い値を示します。そして、そこからまた回復し、上昇することを例年繰り返します。

これらのことから、1月からの時期に、乳量は増える時期なのに、乳成分は下がってしまうという傾向になります。よって、飼養管理上、乳量は多く搾りながら、如何に乳成分を下げないかがポイントとなります。飼料設計も、単にエネルギー充足ではなく、乳脂率を維持できるように良質粗飼料を与える、粗飼料の掃き寄せを頻繁に行うといった対策が必要となります。

特に最近は為替の影響により、良い粗飼料が高価で入手しづらい状況にあります。安易に粗飼料の質を落としてしまうと、結果として粗飼料の食い込みが足りなくなり、ルーメンアシドーシスといった周産期病の原因にもなってしまいます。

また、自給飼料の場合でも、サイレージであれば2次発酵や、乾草のカビなどの品質低下に、十分に気をつけてください。

3 乳中尿素態窒素MUN

前述の乳成分ほど激しい上下変動はありませんが、やはり7～9月の夏季には低下する傾向があります。MUNは飼料基盤により傾向が異なりますが、一般にはMUNが高いと繁殖成績の悪化を伴いますので、大豆粕などの蛋白質が必要以上に給与されないように注意します。

4 繁殖成績

繁殖は、ご存知の通り夏季が最も良くない時期で、10月位から遅れていた牛も受胎します。しかし、夏季から1月になってもまだ受胎しない牛は獣医師に相談してみてください。

(相原)